
データの魔物に成りし者

妖精瞳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

データの魔物に成りし者

【Nコード】

N2115L

【作者名】

妖精瞳

【あらすじ】

「面白ければ何でもいい」という男

龍月そんな彼が

恋人と共に、神にチート能力をもらい転生。

「原作なんか気にしない、っーかほとんど覚えてない」というわけで好き勝手しまーす。OKですか。

(迷惑だと思いますが、友人からアイディアをもらいまくったんで、大戦時代に送られたという設定で、初めから変えます
ほぼ全てが、別の作品になります

それでもよろしい方は引き続き見ていってください。

プロローグ

夕方に近い頃、とある町近くの丘に二人の男女の姿があった。少年は木にもたれかかり、空を見ていた。少女のほうは、正座し読書をしていた。

「暇だなあ。いつそ隕石でも降ってこねーかな。」
と少年

みどう りゅうつき
御堂 龍月はそうぼやいた。

「だ、だめだよ龍君。本当に降ったらどうするのよ？」
面白いように冗談に反応したのは、龍月の恋人である少女

るかみ ひかり
神 ひかり

鳴な

「ハハッ。こんな願望で降るわけないじゃん。大げさなんだよ、ひかりは。」

「でも、本当に降って此処に落ちてきたら、どうするのよ？」

「その時はその時。神様に頼んで、転生しようじゃねえか」
そんな感じで龍月とひかりが、話していると

その考え、頂き

ギューン

どこからか声が聞こえて、本当に隕石が向かってきた。

「「え？」」

それが二人の今生の最後の言葉だった。

.....

「んんんん此処はどこだ」

龍月が目を覚ますと、何も無い白い神殿のような空間にいた。いや、彼の横でまだ目覚めてないひかりと、彼の後ろにポツンと襖が浮いていた。

「（なんでだよ!?なぜ襖!?神聖な雰囲気かぶち壊しじゃねえーか!!!）」

彼は心の中で突っ込みつつ、ひかりをゆすって起こそうとした。

「ひかり。起きろ」

「うんんんんあ、おはよーございまふ、りゅー君。………
……って龍君!？」

何で龍君が私の部屋に!?まさか私を襲いに!?だ、だめだよ!
!心の準備がまだ………」

「おちつけ。まず、此処はお前の部屋じゃねえ。よく思い出せ」

「ふえ?………えつと・確か・隕石が………って
私達死んじゃったの……!!!??」

ひかりは涙目で龍月に縋る。

「だから落ち着けて。それも含めて、あの襖の向こうにいるだろ
う奴に

聞こうと思うから。」

「そ、そうだね。」

そう言って、龍月とひかりは襖を開け入っていった。

襖の向こう側は、それまでの空間と別世界だった。

たたみの床・・・木製のたんす・・・昭和を連想させるテレビ・・・中央にあるコタツ・・・その上にある蜜柑・・・そしてコタツに入ってお茶を飲んでる、天使のような羽根を持つ女性・・・

「神聖さはどこ行ったー！ー！ー！ー！ー！！！！？」
その光景に思わず叫んでしまう龍月であった。

「うるさいわねえ。ほら、お茶出すから座って頂戴。」
そういつて女性が指を立てて振ると、コタツの上にお茶が二つ現れた。

二人はそれに驚きながら、言われたとおり座る。

「私はこの世界を担当する神よ。名前は、そうねえ〜
イルとでも呼んでもらうわ」

「・・・龍月だ」

「ひ、ひかりです」

「で、何のために俺たちを殺したんだ？」

「あら、直線的ね、状況把握はもうできたのかしら？」

「ああ。理由は知らないが、俺たちの会話と、あの時の言葉からして俺たちに転生して何かして欲しかった。違うか？」

「ええ、そうよ。私、最近暇でねえ〜。偶然下界を見ていたら貴方の言葉を聞いて

「ピーンときたのよ。貴方を、私が今はまっている『ネギま!』?」
の世界に

転生させてみたらどうかしらって。」

・進化する方法は『デジモンフロンティア』と同じ方法。

・デジヴァイスは絶対に壊れず、念じれば手に現れる。また、他人が持つと消える。

・FFの呪文が使える。(召喚系は使えない)&(デジモンの時は使えない)

・魔力・・・木乃香の十倍

・気量・・・ラカンと同レベル

・デジソウル・・・無限 (龍月のみがもつ、デジモンの技に使う)

ひかり

・全魔法と全魔道具の知識を持つ

・『熾ロト・ファイアス天覆う七つの円環』を一日5回まで使える。

・魔力・・・木乃香の五倍

・気量・・・ラカンの1/2

共通

・『不老不死』&『年齢自由変化』・・・名前どおり

・『絆念話』・・・二人の間だけ、どんな状況でも念話ができる。

・『全才能』・・・全ての魔法・武術がチートレベルで覚えられる。

・『異空間』・・・自分専用の空間を扱える。ただし、道具収納にしか使えない

・『絶対武具』・・・何をしても壊れず、念じれば必ず手元にくる武器
のと同じ）
龍月 ガンブレード（形はFF？のスコール

ひかり 賢神の杖（頂部に七色に輝く宝石がある
金属製）

~~~~~

「これでいいのね？」

「ああ」

「はい」

イルの確認に二人がうなづく

「じゃあ、送るわよ」

「ちよつと待て!!」

「なによあゝまだなんかあるのゝ」

龍月の静止にイルは不満げだ。

「いつの時代に送るか言っていないだろうが!!」

「ああ、それね。行けばすぐわかるから大丈夫よ。

もうなにもないわよね？じゃあ逝くわよ」

イルはそういつて手をかざすと龍月たちが光になり始めた。

「もつなるようになれだ」

「運任せだねえ」

龍月とひかりは、そう言い合い消えていった。



## プロローグ（後書き）

駄文ですがどうかご勘弁を

## 1話(前書き)

かるゝいプロフィール。

名前：御堂 龍月

身長：176cm。

容姿：『little busters』の棗 恭介。

性格：面白さ絶対主義。

戦いは、冷静で冷徹。

進化の掛け声：バスター・スピリット・エヴォリユーション

名前：鳴神 ひかり

身長：145cm

容姿：『イツナさんと!』の一宮 ひかり。

性格：若干天然が入っているが、心の芯は強い。

家事最強

戦いは、臨機応変

## 1話

side・龍月

「うおおおおおおおおお（きゃあああああああああああ）  
ああ）」

俺たちは今叫んでいる。なぜか？。雲の上から落ちてるからだ。  
しかも下は戦場。つまり、大戦期に落とされたって事だ。

ツク。この状況をどうにかするには・・・これだ！！

俺は、右手にデジヴァイス、左手にデジソウルを出す。そして

『バスター・スピリット・エヴォリユーション！！！！』

俺の体は光に包まれる。光が晴れて、そこにいたのは・・・

『メタルガルルモン！！！！』

『ひかり、俺の背中に乗れ！！』

「う、うん！！」

俺はひかりを乗せると、下に危険がない速度で降りていく。

下を見ると、一方の集団に巨大な雷が放たれていた。

『（あれはたぶん、ナギの魔法。だったらあっちに撃てば）

ひかり！！あっちに向かって氷の魔法を放つんだ。』

「え、うん。わかったよ。」

・・・ガイ・ゼル・グレイズ・ラ・ゼイス・契約に従い（ト・  
シユンボライオン）

我に従え（ディアークネーター・モイ・ヘー） 氷の女王

クリュスタリナー・バシレイア

来れ（エピゲネーター） とこしえの（タイオーニオン）  
やみ（エレボス）！

えいえんのひょうが（ハイオーニエ・クリユスタレ）！！」

『グレイスクロスフリーザー！！！！』

俺とひかりは、ナギたちの敵に大ダメージを与え、  
地上に降りた。

「誰だ、お前ら！！」

s i d e o u t

s i d e ・ ナギ

・・・千の雷！！！！」

くそっ、敵が多すぎる。いったい何人いやがるんだ。

そう考えてると、魔力を感じた。

な、なんてでかい魔力だ。

俺の何倍もある。

気がつくと、向こうの敵のほとんどが凍っていた。

俺たちの味方か！？

「あ、ナギ。どこにいくんです！？」

後ろでアルがなんか言っているがきにしねえ。俺は、これをやった  
奴が気になったので、

魔力があるほうへ向かった。

そこには、ピンクの髪の少女と、青い機械の獣がいた。

な、なんだありゃあ!?

気になった俺は思わず声をかけていた。

「誰だ、お前ら!！」

2話(前書き)

〽  
〽は、念話です

## 2話

side 龍月

「誰だ、お前ら!!」

ん?お、ナギ・スプリングフィールドだ。  
さて、どうするか・・・

『誰だといわれても、なんと答えればいいんだ?』  
「うお!しゃべった!?!」

ああ、そういえばメタルガルモンのままだったな

「ナギ!勝手に行つてはだめですよ!!」

俺が、元に戻ろうか迷っていると、

アルビレオ・イマ 近衛 詠春 フィリウス・ゼクトがやってきた

まだ、ジャック・ラカン仲間じゃないのか?

「あなた方は何者ですか?」

アルビレオが殺気を放ちながら聞いてきた

『何者かでなく、何が聞きたいのか具体的に言え。そのの奴にも言  
つたがな。』

それと、敵意は良いが殺意を向けるな。』

「っ!?!?・・・失礼しました。ではまず、あなた方のお名前を教えてくださいませんか?」

俺がしゃべったことに驚いたのだろうが冷静に要望にこたえてくれた。

『俺の名前は、龍月だ』

「私の名前は、ひかりだよ」

「そうですね、では私達は『知ってるから良い』む・・・。では、なぜ此処にいるのですか?」

考えてなかったな。どうするか。龍君、龍君。ヾ

「なんだ?」

「ここは私に任せなさい」

「あ、ああ。」

ひかりは、念話でそういつて話し始めた。

「えっとね。私達は散歩してただけなんだよ」

「「「「は?」「」「」」

「じゃ、じゃあなんで攻撃したんですか?」

アルビレオは戸惑いながらも聞いてくる。

「えっとね、戦場を飛び越えようとしたんだけど、敵だと思われて攻撃されたから、つい反撃を」

紅き翼の面々が、ポカーンとしている

あ、ナギが立ち直った。

「じゃあ、お前ら仲間にならないか!!?」

side 詠春

ああ、またナギの悪い癖が始まった。  
胃が痛い・・・

「お、おいナギ。こいつらがスパイだったらどうするんだ!?!」  
「何言ってるんだ詠春。そうだったら味方にあんな攻撃放つわけないだろ」

「だが・・・」

俺とナギが言い争っていると、向こうでゼクトが獣に話しかけていた。

「お主、見たことないのだがどういふ種族なのじゃ」  
『ああ、すまない。この姿のままだったな。少し待ってる』

獣がそう言つと、光りだした。

光りがおさまると、青年が立っていた。

「これが俺の本当の姿だ。さっきのは、俺の能力だな。  
他にも色々成れるぞ」

俺たちは再び呆然としていた。  
また、ナギが一番に我に返り、こんなことを抜かした。

「おもしれえ！！やっぱなかまになれ！！」

side ひかり

「ねえ。どうする？」

「おまえは、紅き翼という？」

「おまえはって、龍君は？」

「あ、敵側に行くつもりだ？」

「なんで？一緒に行くのよ？」

「一方的蹂躪に興味ないんだよ、じゃあな？」

「あー！」

そう念話でいって、消えた。

しょうがないな。

「どうも。改めて、鳴神 ひかりです。

これからよろしくおねがいします。」

私がそう言つと、アルさんが聞いてきた

「龍月という人はどうしたんですか？」

「いや、龍君は、一方的蹂躪に興味ないって言って

敵さんのほうに行きましたよ。」

「あなたはこちらで良いんですか？」

「はい。あと、龍君から（本当の敵を知れ）と言っていましたよ。  
言っていないですけどね。」

「その言葉が何なのか気になりますけど……」

まあこれからよろしく願います。」

「~~~~~」

### 3話（前書き）

オリエント。というよりオリエント組織登場

文才ないよ（滝泣）

### 3話

side 龍月

・・・そついや帝国どこだつて？・・・  
まあいいや、適当に進んで人がいたら聞いてみよう

~~~~~3時間後

平原ばかりじゃないか！？どこで間違えたんだ？ 最初からです？。電波が聞こえた気がしたが、気にしないでおこつ。

~~~~~2時間後

森の奥に建物が テレツテレ~~~~~  
よつしゃ！では早速聞きにいくとしますk・・・誰かくるっ！？

俺はシュバツと木の上に身を隠した。  
心配がした方向を見ると、男二人がリヤカーを引いていた。  
リヤカーには金色の何かが乗っていた。

つて隠れる必要ないじゃん。あいつらに道聞けばいいか。  
「すみまsつ・・・！！！」

俺が声をかけようとする、見えた。リヤカーの中身が見えてしまった。

それは、体を縛られた金色の髪の女性だった。  
しかも女性には、獣耳と、九本の尻尾があった

「（妖弧？いや、邪悪な感じはしない。神獣の類か）」

さっきの声は気づかれなかったようなので、  
耳を澄ませて男達の声聞いてみる。

「……………にしても今回は楽だったよなあ。」

「ああ。こいつ自体の力は強いくせに、自分が守ってる森を  
燃やされると弱っていくんだもんね」

「間違えて全部燃やし尽くしてしまった時はあせったな。  
消滅するんじゃないかって」

「こいつが消滅する前に森とのパスを切るのが間に合ったんだよ。」

「へえ〜〜。にしても今回は上玉が多いな。こいつに、雪龍に、  
覇竜と。」

解析が終わったら好きにしていんだよね？」

「そうだったな。オスの方の、神狼と鳳凰もイケメンだったから  
金持ちの女性にでも売れば、金になるだろう。」

「ん……………ん……………!!」

「お。起きたか。今の話聞いてたか？まあいいや。安心しな。解析  
中は安全だ。」

別に解剖するわけじゃねえんだから。まあそのあとは……………

ギリッ

「（下種共がつ！！・・・やはり『完全なる世界』か？  
高位な奴らを解析してどうするつもりだ？）」

心の中では激しい怒りが渦巻いていた。

そうしているうちに男達は、建物の中へ入っていった。

「（あそこが研究所ってことか？・・・突入するか。）」

俺は木から降りて、右腕を横に振った。振り切った右腕にはガンブレードがあった。

そのまま研究所に近づくと、電子音が鳴った。

『指紋照合を行います。センサーに手を置いてくd（パンツ！。ズバー！！！）』

ピーーーー・・・』

トリガーを引いて、勢いの乗った斬撃を扉に叩き込むと、扉はバタリのように斬れた。

「さあ。破壊の始まりだ・・・」

side FREE

龍月が扉を壊し中に入ると同時に警報音がなり、すぐさま戦闘員が現れた。

「貴様何者だ！！！？」

リーダー格らしき青年が怒鳴るが

「……………」

龍月は答えない。研究所の中に呆然としているのだ。

あの男達が話してたとおり、人外は危害を加えられていないようだ。

そのかわり人間が、いや人間だったものがそこらじゅうにあった。

一部が悪魔になっていたり、下半身が触手になっていたりしているモノが

散乱していた。

ギリッ

「オイ貴様聞いてい……………」  
ザンッ

龍月は目の前の男を斬り言った。

「よう、虫けら共。この世に未練はねえか？」

ああ、あつても大丈夫だ。別に幽霊にはならねえ。

俺がその未練ごと……断ち切るッ！！！！」

そういつて龍月は周りの敵を斬っていった。

どの敵も呪文を唱えることすら許されず、完全に一方的な蹂躪だった。

「っち！神獣たちは、あの扉の向こうか？」

龍月は死体を一瞥すると、扉のほうへ歩いていった。

扉を開くと、2、30いる人たちがこちらに杖を向けていた。

「……………」魔法の射手 火の150矢！！！！！！！！

全方位からの攻撃がくるが、龍月はあわてなかった。

「・・・グラビガ」

ただ一言つぶやいただけで、部屋全体に超高重力がかかった

火の矢は全て消滅し、魔法使い達は地に伏せ、数秒後  
全員が圧死した。

「さて、もう人間の気配はない、か」

次の扉をくぐると、中央に机があり、横に五つベットがあった。

五つのベットにはそれぞれ人間のすがたの者達が眠っていた。

しばらく起きそうになかったので、異空間から本型の別荘を出した。

「顕現せよ」

龍月がそう言うと、龍月の前に魔方陣が現れた。

「テレポ」x5

そのまま五人を魔法で別荘に転送した。

### 3話（後書き）

龍「戦闘描写短すぎじゃね？」

妖「相手が雑魚だからねえ。俺が下手つてのも有るけど」

龍「つーか帝国行くの？」

妖「いや、なあ。そうすると、どこで『紅き翼』と合流すれば  
良いかわからなかったからね。もう、なしにしよう」と

龍「いい加減だな」

妖「いい加減で悪いか！？こちら、文才がないんだよ！？」

龍「逆切れもらいましたー」

妖「今回は、助けた奴らとの会話だ。次回もよろしく！！」

龍「いきなり！？何の脈絡もないな！？」

妖「じゃあねえ〜」

龍「え、ほんとにおバタンッw」

## 4話

side・龍月

今、目の前で助けた五人が、ご飯を必死に食っている。

目が覚めた瞬間、襲われた。軽く無力化して事情説明したあと作ってやったら食うこと食うこと。

で、全員食い終わったので……

「さて聞くが、お前ら領域持ちの高位神獣だろ？」

「元、であるがなあ」

「ワシ等の領域は彼奴等によって壊されてしまった。チンピラ風なのが神狼、老人が鳳凰だ。」

「お前らほどの奴らが、どうしてやられたんだ？」

「そのウチ等ほどの相手を、簡単に無力化しよった奴がよく言うわ……」

奴等一気に森に、古代呪文で攻撃してきよって、一瞬で森がボンヤ

「私もそうなんです」

「ええ」

関西弁っぽい奴が九尾で、丁寧なのが雪龍、首を振ってるだけなのが霸竜だ。

「…………お前等これからどうするんだ」  
「どうするってなにがだあ」

「だからこれから何処に行くのかって事だ」  
「む〜何処に行くかの。」

「行く場所ないですね」

「はいはいー！、此処にずっと居るってのはどうやー！」

「「それだ（や）（よ）！ー！」「」

「おぬし等……………」

……………こいつ等、勝手に決めやがって。

「確かにここの空気は澄んでますし」

「精霊が多いし」

「全部の季節があるってのも良いしなあ」

そう、この別荘は自然が調和されて出来ている。  
精霊も自由にさせて動きを制限させていない。  
中心に屋敷があり、そこから四季が同時に存在している。  
凶化すると…………

川 花山 川

川 川 川

川 川 川

川 春森 川

川 川 川

川 川

雪山 冬森 屋敷 夏森 火山

川 川



「本来わしらクラスの神獣は名前がないんじゃないよ」

「ちょうど良いから、ウチ等の領域と名前くれてくれんか？」

「ついでに主従契約もしておきましょうか。」

「もちろん神獣用の。」

「そうすつかあ」

「問題なんかないわ」

~~~~~1時間後

「準備できたで」

順番は、鳳凰 九尾 神狼 雪龍 霸竜、だ

地面に書いた魔法陣が光り出す。

「我、鳳凰と呼ばれし者なり。汝を我が主と認め、契約を申す。
返答やいかに」

「我、汝を従者と認め、地を与え、名を与える。」

我が名は、御堂 龍月。汝の地は、火山。

汝の名は、『ゼム』。これより我と共に」

「了承。これにて契約成立とす。」

「ふう。これからよろしく頼むぞい。」

「ああ、こちらこそ」

「我、九尾と呼ばれし者なり。汝を我が主と認め、契約を申す。
返答やいかに」

「我、汝を従者と認め、地を与え、名を与える。
我が名は、御堂 龍月。汝の地は、花山。
汝の名は、『トー』。これより我と共に」

「了承。これにて契約成立とす。」

「よろしゅう頼むわ。」

「じちらじそ」

「我、神狼と呼ばれし者なり。汝を我が主と認め、契約を申す。
返答やいかに」

「我、汝を従者と認め、地を与え、名を与える。
我が名は、御堂 龍月。汝の地は、夏森。
汝の名は、『ガロム』。これより我と共に」

「了承。これにて契約成立とす。」

「頼むぜい」

「おつよ」

「我、雪龍と呼ばれし者なり。汝を我が主と認め、契約を申す。
返答やいかに」

「我、汝を従者と認め、地を与え、名を与える。
我が名は、御堂 龍月。汝の地は、雪山。
汝の名は、『ミレイ』。これより我と共に」

「了承。これにて契約成立とす。」

「よろしく願います」
「じちらじそ」

「我、霸竜と呼ばれし者なり。汝を我が主と認め、契約を申す。
返答やいかに」

「我、汝を従者と認め、地を与え、名を与える。
我が名は、御堂 龍月。汝の地は、秋森、岩山。
汝の名は、『コロナ』。これより我と共に」

「了承。これにて契約成立とす。」

「クスクス、これから頼むわね」
「ああ」

「なんかかなり疲れたな」

「当たり前じゃ。神獣クラスとの主従契約は、かなりの魔力を消費するのじゃぞ」

「それを五連続・・・規格外やな。」

「うるせー」

「で、これから具体的にどうすんだあ」

「そうそう、そもそも最初にいつていた二つの組織って何ですか」

「一つは、『完全なる世界』。今起こっている戦争を意図的に起こし世界の滅亡を計画している組織だ」

「・・・それが私達を捕まえた奴等？」

「いや、俺も本当は同じ組織だと思っていたんだが

これが机の上にあつてな」

「これは、計画書ですか？」

「ああ、これには強大なエネルギーを生み出す方法を

探しているようだ。どういう意図に使うかはわからないが

やり方からして碌な事じゃないだろう」

「強引過ぎるしなあ」

「で、この組織名はここに示しているように『永劫を担う旅人』

何をするかは不明だが、危険だということとはわかる」

「いいでー。どちらもつぶいちゃるわ」

「さて、お前等は此処で力をつける。此処は時間圧縮をしているから此処での1週間は、外での一時間となる。今の自分を超えて見せる俺は、外の研究所を完全に潰してくる」

「魔力も体力もほとんどないではないか。大丈夫なのか？」

「別に戦うわけじゃない。研究所を燃やすだけだ。

安全なところにいけば、此処に戻ってくる」

そう言う俺は、別荘から出て行った。

5話（前書き）

人が多くなったので
台詞の前に名前をつけます。

5話

龍月は別荘から出た後、ヒトだったものを研究所の外に運んでいた。やがて研究所の入り口に集めると、

龍「…………お前等をこんな姿にした奴等は必ず潰してやる。

だから安らかに眠れ。…………『ファイガ』」

魔法で研究所ごと彼等を燃やした。

龍月はしばらくそこで祈っていた。

龍「さて、…………出て来い!!」

すると人影が二つ降りてきた。

?「へえ〜気づくんだ。その程度の魔力しかないのにすごいね」

??「本当の実力なんか、戦ってみないとわからないとわからん

あなどるな」

槍を持つ男(?)と斧を持つ男(??)が現れた

龍「『永劫を担う旅人』、か?」

?「ご名答!!俺の名は12th」

??「我が名は11thだ」

龍「その名は称号かなにかか?」

11th「ああ。俺たちは12人いる幹部のメンバーだ」

12th「もつともそんなじゃ一番よえーが、な」

12thはそう言い、龍月に槍で攻撃しだした

龍月は、それをガンブレードで捌く

龍「ツチ、その、幹部があ！な、んの、ようだああ！！！」

1 2 t h「ああ！研究、所の、状況をお！調べようとしたらあ、

てめえが、燃やしてたんだよお！！！」

龍月は槍を相手ごと弾き飛ばす。

龍「（こっちは体力無いつてのにつ！）それで俺の始末ってか？」

1 1 t h「ああ、悪いが報いを受けてもらう」

1 2 t h「覚悟しろよお」

斧を振りかぶってきた

1 1 t h「はあああ！！！」

龍「その距離で当たるわけえええー！！？」

斧がいきなり巨大化した。あわてて横に飛びのくが
衝撃が襲う。

龍「があああ」

1 2 t h「そらそら、休むひまはないぜえ」

槍が突っ込んでくる。バックステップで距離をとるが
槍が伸びてきた。

龍「なっ！！くっ！！」

ぎりぎり横に飛び交わす

ズザーーーー！！

龍「おいおい。ずいぶん変てこな武器を持つてるじゃないか」

1 2 t h「まあな。こいつは盟主にもらったんだ」

龍「盟主？」

1 1 t h 「1 1 t h ！！」

1 2 t h 「おお。すまねえ。つい話しちまったぜ
まあ、いいじゃねえかどうせ殺すんだし」

1 1 t h 「そういう問題ではないわ！！」

龍「おいおい、俺を無視すんなよ。まだ勝敗が決まったわけじゃねえんだぞ」

1 2 t h 「決まったも同然さ。お前と俺の速さは互角。

さらに、こつちには一人多い。ほらな」

龍「ツチ！隠しておきたかったんだがな。

魔法を使うさ」

1 1 t h 「残念だが、我等には魔法が効かん。

その代わり我等も魔法が使えないが、な」

1 2 t h 「そのとーり！！」

龍「は、そんなもんお前等の体見てりゃわかるさ

精霊がよりつかねえし

俺が言ったのは攻撃魔法じゃないさ」

「なに？」

龍「見せてやるよ・・・俺の魔法をなあ！！」

そういつて突っ込んでいく

1 2 t h 「は、何が魔法だ！！小細工なんか通じないぜえ」
そういつて槍を高速で付く

龍「……『ヘイスト』」

が、速さがあがった龍月にことごとく避けられる。

12th「なっ!!」

龍「はあああー!!」

12thに向かってガンブレードを振りかぶるが
ガキンツ

11thが投げた斧によって防がれる。

11th「12th!! 貴様は盟主に障害になる敵が出たと

盟主に伝える!!」

12th「俺は、まだやれる!!」

11th「敵の力もはかれん奴が何を言う!!」

そう言つて、12thに向かつて転移符を投げる

12th「な。11thてめええー!!」

12thは消えていった

11th「……待たせたな」

龍「別に待つてないさ」

さっきのやり取りの間、龍月はまったく攻撃をしなかった

龍「……言い残すことは?」

11th「ないな。……では、いくぞ!!」

はあああー!!

11thは、斧を振りかぶり巨大化させて、渾身の力で打ち込む。

龍「終わりだ。『ヘイストガ』。うおおー!! 『連続剣』!!」

龍月は、さらに速さをあげて、剣技を叩き込む。

「11th「がああー！！！」

11thは、体のあちこちを切り刻まれる。

11thは倒れると、やがて灰になって消えた
龍「どういうことだ？・・・」

龍月はそれを疑問に思ったが、安全のため
すぐにその場を去った。

5話（後書き）

1 2人の幹部は1 t h } 1 2 t hですね
わかります

1 2人の幹部といったが、全員登場はしない。
4 t h以下は弱いが、3 t h以上は格が違う。

ほとんどがいつの間にか倒されている状態。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2115/>

データの魔物に成りし者

2010年10月9日00時54分発行